友人諸兄姉　　平成２６年１月１０日

北田泰治

台湾（烏来•新竹）見聞録　続編

安倍首相は平成２５年１２月２６日靖国神社を参拝しました。中韓は直ちに抗議の声明を出しました。これで両国との首脳会談はまったくメドが立たなくなりました。

この続編は、台湾がなぜ“親日”で、中韓が“反日”なのかを探る目的で編纂したものです。主として３人の帰化人（黄文雄、呉善花、石平）による対談集「帰化日本人」から引用させてもらいました。日本人では窺い知れない出身国の背景や外国人から見た日本人について、暖かいまなざしとともに鋭い指摘がされています。詳しくはこの本をお読みください。

1. おもてなしの違い

「お・も・て・な・し」は、日本人のホスピタリティを表す言葉として、すっかり有名になりました。シャネル日本法人社長のリシャール・コラス氏は「日本人のおもてなし、優しさは、世界に残った素晴らしい文明です」と絶賛しています。

ただ、この言葉には、多少改まった、気取った語感があります。日本人は穏やかで控えめな民族だと外国人から見られています。喜怒哀楽を表に出さず、大きな手振りを交えて話すことは得意ではありません。オリムピック招致委員会では、英コンサルタントのアドバイスで安倍首相はじめオールプレゼンターは大きなゼスチュアを交え、笑顔一杯でスピーチしました。これは従来の日本人像を覆す出来事でした。

台湾人もホスピタリティに富んだ民族です。台湾人の“おもてなし”は自然体で、対応が気さくです。その違いは羞恥心の有無にあると思います。台湾人は恥ずかしいという感情が余りありません。ルース・ベネディクトは「菊と刀」の中で、日本人は世評を最も気にして行動する「恥の文化」を持った民族だと言いました。言い換えれば、シャイな民族ということでしょう。

台湾人にはそれがありません。これは文化の違いですが、家庭労働の習慣が影響していると思います。台湾では子どもの頃から親を助けて商売をすることが当たり前のことでした。人と接することになんの違和感を持たずに育つことが、気さくな性格を形成する土台になっているのではないかと思います。

理屈はどうであれ、台湾人は親切です。通りすがりの人に道を尋ねても、手振り身振りで教えてくれます。中には、途中まで案内してくれる人もいます。これは年配者も若い人も変わりがありません。台湾の交通機関にも“博愛座”という優先席があります。この対応は見事です。すぐに席を譲ってくれます。これは日本よりも進んでいます。

２．台湾・中国・韓国の教育制度

台湾出身の帰化人で文明史家の黄文雄氏によれば日本、台湾、韓国、中国の近代教育制度は、いずれも明治期の日本の教育制度がルーツになっていると述べています。この制度を最初に取り入れたのは、中国では清朝末期、韓国では李朝末期です。そして日本統治時代に本格的になります。

台湾の教育制度を確立したのは、台湾総督府初代学務部長に就いた伊沢修二（２９歳で東京師範学校長に就任）です。彼の手掛けた教育制度には２つの特徴があります。１つは実業教育で、それは商業、工業、農業などです。中国の儒教的な教育には、そういう実業教育はまったくありません。もう１つが国民教育です。国土・自然・文化・言語を総合的に学ぶのが国民教育です。

日本が台湾に入って来た時点での教育普及率は０．０６％でした。２０世紀に入った頃には、それが２％ほどになります。中国ではもっと低い数字でした。台湾では以後、教育普及率は急上昇していき、終戦当時には７０％を超えていました。韓国も中国も同じような形で日本の教育制度を導入したので、国語、算数、理科、社会といった教科は台湾、韓国、中国に共通なものです。（黄氏）

３．文化大革命後の中国

中国も日本の近代教育制度を取り入れました。しかし、毛沢東には近代教育に対する不信感があり、実際にやったのは近代教育ではなく反近代的教育でした。国民に近代的な知識を持たせないようにし、文字すら読めない無知なる農民が一番偉いという「愚民教育」を行ったと帰化中国人で評論家の石平氏は述べています。石氏は中国四川省生まれの漢族系中国人です。２００７年に帰化し、日中の政治・経済・外交問題について論じています。拓殖大学の客員教授も務めています。

石氏がなぜ日本に帰化したかについて、「私は毛沢東の“小戦士”だった」という自伝で以下のように述べています。石氏は大学に入るまで“毛主席の忠実な小戦士”を自認する熱烈な毛沢東の信奉者でした。彼は１９８０年に北京大学に入学し、毛沢東によって迫害された著名知識人の子弟と出会い、毛沢東が“慈悲の救世主”どころか多くの民衆を殺した“非人間的権力者”だったことを知ります。

石氏の世代は、「８０年代の大学生」と呼ばれ、“自由”と”民主“をスローガンに民主化運動に没頭した「民主化運動の世代」です。北京大学はその中心的存在でした。文革の被害者だった鄧小平は、毛沢東の文革は「過ち」だったと暴露し、それを徹底的に批判するキャンペーンを展開します。それが「改革開放」です。若者たちは、鄧小平の「改革開

放」に自由・民主への期待を抱き、その路線を支持します。しかし、１９８９年６月４日に「天安門事件」が発生し、人民解放軍によって多くの学生が殺され、「民主化運動」は封殺されます。

石氏は、鄧小平がやった「改革開放」は、共産党独裁体制を維持するための改革だったと断罪し、共産党独裁体制が続く限り、真の民主国家は実現しないと判断し、祖国を捨てる決心をした、と述べています。

中国は毛沢東の文化大革命で、中国の歴史をことごとく否定し、農民中心の共産国家を樹立しました。その根幹は、権威の否定と破壊でした。豪族や地主、知識人など支配階級や指導者を、紅衛兵を使って徹底的に弾圧し、想像を絶する殺戮が行われました。

その結果、教育を受けていない農民だけが残る国になりました。毛沢東はそれらの人々に対し、「毛語録」を使って洗脳教育をしました。儒教の経典として尊ばれた「四書五経」など中国が誇る古典を学ぶものはいなくなり、徹底した唯物主義が力を持つようになりました。共産党のいいなりになる人間だけが生き残り、中国人が心の拠り所にしてきた宗教や行動規範、伝統的な価値観は失われました。日本の植民地政策が否定されたのは当然のことです。

日経の日曜版に「詩文往還」という連載コラムがあります。著者は張競という中国人の比較文学者です。平成２５年１２月８日版に文化大革命の時に、知識人はどのような行動をとったかについて、次のように書いています。

《 政治的な迫害に直面したとき、知識人にはおよそ２種類の反応がある。老舎のように、良心への介入を拒否するために、自殺するか、保身のために魂を売るかのどちらかである。馮友蘭は後者の方を選んだ。馮友蘭に似た文化人として日本でも著名な郭沫若がいる。

文化大革命が始まった頃、郭沫若は自分の過去の作品を全部焼き捨てる、と宣言して自己批判をした。毛沢東や夫人の江青を賛美する数々の詩を書き、文革を擁護する言論を発表した。７６年５月に文化大革命を礼賛する詩を書いたかと思うと、１０月に「四人組」が追放されると、ただちに「四人組」を攻撃する詩を公にした。その恥ずべき変節ぶりは知識人の間で物議を醸した。こうしたこともあって、いつの間にか郭沫若はほとんど無節操の代名詞のようになった。 》（以下、略）

昨年放映されたＮＨＫの“クローズアップ現代”では、毛沢東は公平な社会を目指し大

衆路線を推し進めた。しかし、現実には格差が拡大し、腐敗が蔓延して、コネがものを言う階級社会となり、民衆は将来に希望を持てない社会になった、とリポートしています。現代中国を代表する作家の閻連科氏も「中国では経済が発展し、人々は宗教も共産党も信じず、拝金主義が蔓延している」と述べています。

心の支えを失った民衆は非公認のキリスト教に救いを求めています。共産党や政府はキリスト教信者が増えれば、体制批判が強まりかねないと警戒感を強めています。改革開放の波に乗り遅れた貧困層や行政に不満を持つ人たちを中心に「地下信者」は１億人を超えたと言われています。

４． 反日・反共の韓国

朝鮮半島では日本が併合して以来、教育だけでなく、産業の育成、インフラの整備を推し進めました。戦後韓国は、このインフラや育成された人材をフルに活用し、日本からの経済援助とも相まって、朴正熙大統領時代に「漢江の奇跡」と呼ばれる経済発展を成し遂げました。この事実についてはあまり取り上げられません。

朴正熙大統領と朴槿恵現大統領（後ろ中央）

朝鮮は儒教に支えられた階級社会でした。それが崩壊し長幼の序を重んじる伝統的な風習がすたれ、大家族制から核家族制になりました。経済分野では政権と癒着した新ブルジョア階級が台頭してきました。学歴偏重の社会となり、金儲けが人生の目的になってきました。かくして、日本統治時代の政策は、中国同様ことごとく否定されてしまいました。

その根幹は歴史教育です。韓国済州島出身で日本に帰化した拓殖大教授の呉善花さんは自身の体験を以下のように述べています。

《 小学校の教科書には、民族文化の優秀性を強調するため、他民族をけなす記述が多い。とくに日本人は文化的にわれわれよりも劣等だと記述されている。三国時代（百済、高句麗、新羅）は高度な文化が栄えていたが、日本は文化のない未開の野蛮国だった。その日本に高度の文化を伝えてやった。なかでも最もでたらめなのが日本統治時代の歴史である。史実の巧妙なねつ造・改ざんによって、日本は自分たちの利益ばかり追求し、韓国を暴力的に支配・収奪する悪政の限りを尽くした。それが歴史の真実だと教える。自民族の優秀性に対し日本民族の劣等性を強調し、韓国＝善、日本＝悪という極端に偏向した形で行われている。 》

こうした怨念に近い反日の背景に、韓国人特有の「恨」の存在がある、と呉教授は指摘しています。「恨」とは、「韓国民衆の被抑圧の歴史が培った苦難・孤立・絶望の集合的感

情」（広辞苑）を意味します。嘆きや恨みを行動のエネルギー源とする思考方法です。「韓国人は相手に恨みがあるということを機会あるたびに言いたがる。日本にやられた、ということで力が増してくる」（呉教授）と述べています。

韓国には「反日無罪」という言い方があります。これは“反日”ならば何を言っても、何を書いても問題にならないという意味です。これに対し、韓国の東京特派員は「反日無罪のような態度は、韓国に好意を持つ日本人たちさえ敵に回してしまう」と警鐘を鳴らしています。朝鮮日報の論説委員は、世界中で韓国よりも日本が信頼されているのはなぜかと問うた上で、「興奮しやすい感情を前面に出す気質、理性的ではない時に非理性的にふるまう行動、他人が何を言おうとわれわれが内輪で万歳を叫べばいいという態度、これらを放置していては日本を巡る問題は永遠に克服できない」と書いています。（読売新聞）

しかし、こうした自省派は少数です。日本はそんな韓国とどう向き合うべきなのか。呉教授は「韓国は強いと感じた相手を尊敬する。日本は当分、距離をおいて韓国を眺めるのがいい。こちらから距離を縮めようとすれば足元を見られ、いろいろなことを要求されるだろう」。

５．日本の教育制度を維持した台湾

許国雄氏は、教育、医学両博士号を持つ台湾の政治家です。東方工商専科大学の創設者・学長として、教育分野でも要職を歴任し、日本との交流に尽力した親日家です。

その許国雄氏は自著の中で《 日本人は朝鮮半島よりも早く台湾人への教育、インフラの整備等を行っていました。したがって、台湾は日本が戦争で負けた時点で、住民の民度の高さといい、人口といい、その産業といい、独立国家として国際社会に存在できるだけの資格を十分に持っていました。しかし、台湾には独立の機会は訪れませんでしたし、当時多くの台湾人もそんなことは夢にも思いませんでした。中華民国の軍隊を実際に見るまでは、台湾人の多くは台湾の「祖国復帰」を素直によろこんでいたのです。 》と書いています。

日本がポツダム宣言を受諾して大陸から撤退し始めると、毛沢東率いる共産党は中華民国国民政府（蒋介石総統）に全力で襲いかかり、１９４９年１０月には国民政府の敗戦が決定的になります。大陸のほぼ全域を支配下に収めた共産党は「中華人民共和国」の建国を宣言します。

しかし国民政府は、共産党を反乱団体として「中華人民共和国」を認めず、政府ごと台湾に逃れ、台北を臨時首都とし、いずれ大陸を奪い返すという「反攻大陸」をスローガンに徹底抗戦の姿勢を示します。そして、中華民国の領土は、中国大陸までも含むことを国際社会に主張し続けてきました。台湾に逃れてきた将兵は約６０万人でした。さらに多くの人が台湾へ移住してきました。彼らを外省人と呼び、在来の台湾人を内省人と呼んで区

別しています。

当初台湾人は、日本に代わる統治者が、同胞の中国人であることを喜び、蒋介石一派を大歓迎で迎えました。しかし、蒋政府がとった政策は、台湾人に対する厳しい弾圧でした。その代表的な事件は、１９４７年２月２８日に起きた台湾住民による「反中国国民党暴動」でした。この事件で３万人近い台湾人が殺されました。これを「２２８事件」(右図)といいます。

蒋介石と息子経国

国民党は、台湾に共産主義が広がることを防ぐためと称し、全土に戒厳令を敷き、１９４８年から８７年まで３８年間続きました。台湾人の思想・信条・言論・表現の自由を制限するため、特務と呼ばれる秘密警察が暗躍し、大した罪もない何千人もの台湾人が銃殺されました。この時代のことを暗黒時代といいます。

唯一の救いは、国民党が民主主義を標榜し、共産主義と対峙したことです。息子経国の時代になって、大陸反攻はムリと判断し、台湾自立に傾いていきます。経国の突然の死によって、副総統の李登輝が総統に就任します。これは台湾の歴史にとって、画期的な出来事でした。なぜなら、李登輝こそ台湾復活の救世主であり、シンボルだったからです。

李登輝は本省人（台湾人）初の総統として、経済発展、民主化、台湾人の地位向上に多大な貢献をしました。中でも農業改革と教育には力を注ぎ、日本を手本に台湾人の意識改革に取り組みました。李さんはアメリカの大学を卒業した後、京大で学び、台湾の政治指導者として、その手腕を世界で絶賛されている政治家です。日本の古典に通じ、鈴木大拙、倉田百三、西田幾多郎などを愛読し、芭蕉の「奥の細道」を辿り、自らを“半日本人”と称す、筋金入りの日本通です。

日本人の礼節、武士道を高く評価し、後藤新平を「台湾発展の立役者」と賞賛しています。司馬遼太郎は「世界で最も教養が高く、名利と欲の薄い元首」と評しています。明治人を彷彿させる気骨の人です。

前述の許国雄氏も台湾を代表する親日政治家です。九州大学で医学を学び、医科大学を設立しました。許氏の父親（市議）は、２２８事件で彼の目の前で殺されました。彼は犠牲者の遺族ですが、敢えて国民党に入党し、国民大会代表（参議院議員）になり、李総統の実現に尽力しました。

日台友好にも積極的に関わり、教育の交流、航空路線の整備、新幹線の導入等に功績を

残しました。日本の伝統文化を高く評価し、伊勢神宮の式年遷宮には２度参列しています。昨年の遷宮に参列するのを楽しみにしていましたが、２００２年に他界しました。日本だけでなくアメリカとの交流にも功績がありました。ジミー・カーター、ビル・クリントンとも個人的な親交があり、両大統領の就任式には台湾代表で参列しました。

この２人は代表的な親日家です。台湾で日本の教育制度が維持されたのは、こういう日本贔屓の人が多かったからです。戦後、蒋介石政府による弾圧はあったものの、蒋介石自身は親日家であったため、日本統治時代の政策は否定しませんでした。これが中韓と決定的に違う背景です。

日本贔屓は旧い世代に限りません。９０年代から「哈日族」と呼ぶ１０代、２０代の若い“日本大好き族”が出現してきました。これは日本語を第２外国語として選択する者が

９０％を超えていることが背景にあるようです。日本語教育を通じて日本の文化に触れる接点が増え、日本が好きになっていく人が増えているそうです。嬉しい話です。

６．マスコミの違い

石平氏は、中国のマスコミについて次のように述べています。

《 中国のジャーナリストは、ほとんど党の文宣部がコントロールしている。ジャーナリストの最大の仕事は共産党の宣伝をすること。これをやらないと身分を剥奪される。「人民日報」や「中央テレビ局」は、中国共産党の宣伝の道具として、全国的な独占権を与えられた典型的なジャーナリズムである。日本では信じられないが、「人民日報」に載っている記事の３分の１は共産党の宣伝で、３分の１はお金を取って載せている記事、残りの３分の１が普通の記事である。中国ジャーナリズムの世界では、真実とは何か、ジャーナリストの使命とは何かなんて問題外である。 》と。

《 韓国の場合、対日とか対米とか、対外的な問題についての言論では、きわめて挙国一致が起きやすい。反対意見をいおうものなら愛国心がない、売国奴だと非難されるので、多くの人が口を閉ざして自分の意見を語ろうとしない。韓国では新聞などの活字メディアは政権批判をするが、テレビとなると今に至るまで時の政権にべったりと寄り添う報道をするのが通例。 》と呉教授。

《 台湾はアジアの中で最も言論の自由がある国と言われている。しかし、台湾のマスコミは長年にわたって外来政権のマインドコントロールの手段だったため、マスコミへの不信感が台湾人はとても強い。台湾のメディアを実質的に支配しているのは中国の宣伝部であ

ることを一般市民はよく知っているからだ。 》と黄氏。

来日した頃、日本のマスコミが政府批判を堂々とするのにびっくりした。これは台中韓では考えられないことだ。日本は言論の自由が保障され、開かれた社会である、と３氏は述べています。それが、しだいに変だなと感じるようになった。とくに中国に対する報道には潜在している諸問題を意図的に避けて、よい面だけをクローズアップして報道する傾向が強い。日本のマスメディアというより日本人の特質だと思うが、諸外国に対しては、まず調和したい、仲よくしたいという気持ちが先にたった報道がされる。これが冷静で客観的な報道を妨げてしまうケースが随分あると感じる。外国に対する発言では、相手を怒らせないように節度をわきまえなければならないと、そういう配慮がとても強く働いていると思う。日本のマスメディアは反日の言論があれば、すぐそれに飛びつく、まるで条件反射のように飛びつく。それが日本のマスメディアの特徴ではないかと思う。ようするに自虐的である。これは敗戦後遺症で、今なおアメリカだけでなく中国や韓国に対していいたいことをずばりといわない、いわないことがいいんだ、語らないのがいいんだ、相手が謝れというなら謝っておくのがいいんだ、そういうふうになっているんだと思う、と指摘しています。

イタリア在住の作家塩野七生氏は、日本が大きく右傾化したと報じられていることに対し、「ジャーナリストは基本的に左派だ。海外メディアは日本のことを本当に知って報道するのではなく、中国や韓国の新聞を読みながら日本を見る。日本のメディアの発信力は全くない、有名な国際メディアだから必ずしも正しい報道をするとは限らない、外国に住んでいて身にしみて感じている」と述べています。

異質な価値観をもった隣国との付き合いについて、「近隣国と仲よくあるべきだというのは日本人だけだ。近隣とは常に問題があり、摩擦が起きないという方がおかしい。日本人はこれからも絶対の友好はないと思えばよい。しかし、近隣国ゆえの突破口はある。それは経済関係が密であることだ」と日経のインタビューに答えています。

７．日本に対する叱咤激励

続編の締めくくりとして、日本贔屓の３人の帰化人からの辛口メッセージを紹介します。「おもてなし」は日本人の特質を表す言葉として一躍有名になりました。日本人は思いやりがあって、礼儀正しく、穏やかで控えめな国民だと外国人から見られています。

黄文雄氏は、これは日本の長い文化的風土によって受け継がれてきた特質である、と述べています。その一方で、戦前の日本人は進取の精神、冒険心、好奇心を持ち、勤勉で勇気と責任感が強く、日本人としての誇りも強かった。しかし、その美徳が喪失しつつあると指摘しています。台湾は親日国家であるが、それは戦前の日本人が「我が師」として尊敬されていたからで、決して戦後の日本人ではないと言っています。

呉善花さんは、戦前の日本人は天下国家を語った。そういう意識はだんだん萎えてきた。消極的で国家のことなんか考えなくなった。これは敗戦後遺症である。国民国家としての理念を堂々と掲げ、言うべきことを堂々と主張し、諸外国と対等に渡り合っていくという当たり前のことに対する気後れのような意識が戦後ずっと続いている。

アメリカについていけばなんとかなるといった、自主国家としての体をなさない状態に落ち込んでしまった。この状態からなんとしても脱出していかなければならない。それを期待している国は多い。

中国は極端な形で自分たちの伝統を抹殺した。日本は戦前の明治・大正・昭和まで、伝統的な美風や道徳が守られてきた。しかし、大東亜戦争に負けアメリカに占領されて、マッカーサーの政策で日本の伝統教育が破壊された。それから６０年を経て、日本の伝統社会は崩れてきた、それでも、中国に比べれば全然ましだ、と言っています。

石平氏は、戦後日本は、アメリカとソ連の冷戦構造の中でなんとなくやってきた。国家意識をもたなくても、天下国家を考えなくても、アメリカについていけばなんとなくやっていけた。これからはそれではやっていけない。日本を取り巻く国際環境、とくに中国の覇権主義の膨張を見れば、これは自明である。国家の利益に立脚した外交を積極的に展開すること、日本はこれができない国ではない。国際社会で生き延びるために、日本人はもう一度天下国家に対する使命感を、少なくともエリートのなかで取り戻さなければならない、と述べています。

許国雄氏は、次のように語り掛けています。日本のみなさん、自信を持ってください。まだまだ日本には底力があります。皆さんが立ち上がって、大国としての政治をやれば日本は強い国になります。欧米の金融メジャーからアジア経済を守り、共産主義国家の武力侵攻に対抗できる国は日本しかありません。地球環境保護の問題で世界をリードできる技術も日本は持っています。

私は、日本がもっと強い国になり、政治経済の上で本当にアジアの盟主となってくれることを願っています。日本と台湾が手を取り合って頑張れば、きっとアジアはもっとすばらしい発展を遂げることができると思います。皆さん、すばらしい日本と台湾、そして新しいアジアの建設のために共に努力していこうではありませんか。

陳水扁元総統（台湾）の最高顧問だった彭明敏氏は、「日本人は中国人に歴史認識で批判されると、意気消沈してしまいます。台湾人の立場からは、全く別の面が見えてきます。日本人は聞きたくないことかもしれませんが、台湾人は日本の植民地統治を決して愉快な体験とは思っていません。しかし、日本人が去り、蒋介石の国民党軍がやってきた時はじめて、我々は日中両国の違いを知ることが出来ました。日本は台湾に法治社会を築いて去った。中国人はその法治の体制を破壊し、封建主義に貶めてしまった。結局、日本の台湾への貢献は、幾分かの悪い面にもかかわらず、ポジティブだったのです。」　日台関係の絆の深さからみても、日本は台湾を初め、アジア全体の民主化や自由に対する責任があると彭氏は強調しています。それは、日本への期待の表明でもあります。

日本に住んでいる日本人は、日本の伝統や文化は当たり前のこととして特に意識することはありません。外国に行って日本を振り返り、外国人から指摘されると、ああ日本とはこういう国なのか、と改めて感じます。そういう意味では、外国人が見た日本というのは、日本のよさを再確認する上で貴重です。

３氏は、日本の文化の源流・原点にかかわる日本民族が永遠に守っていくべきものとして、冠婚葬祭の風習、村や町でのお祭り、お墓参り、花見、靖国参拝、除夜と初詣、神棚と仏壇、皇室を上げています。これらはすべて日本人の美意識と美学に根本的な関係があるものです。万世一系を貫いてきた天皇家の存在は、世界的にみても稀有なことです。日本人はこれらの伝統文化をもっと認識すべきでしょう。

８．靖国参拝を巡って

安倍首相の靖国神社参拝は、アメリカからも“失望した”との声明が出されました。これは政府にとって、予期せぬことで少なからぬショックを受けたようです。その後アメリカは、disappointed と言ったのは“失望”ではなく、“残念”、“落胆”の意味だと若干トーンダウンさせました。

これに対し、中野晃一上智大教授は、アメリカが“失望“したのは、”望“んでいたことが”失“われたからだ、ケリー国務大臣、バイデン副大統領が事前にアメリカの希望を述べたにも拘わらず、それを無視しからだと述べています。

評論家の櫻井よしこ女史は、「異形の大国“中国”」の中で、靖国神社参拝について、次のように書いています。これは２００５年５月に、小泉首相の靖国参拝に関して書かれたものですが、日中を取り巻く状況は今も変わっていません。靖国を巡る歴史的背景についても要点に触れています。少々長くなりますが、全文を引用します。

小泉首相は０５年５月１６日の予算委員会で「他国が干渉すべきでない」と述べ、「一個人のために靖国を参拝したのではない。戦没者全般に敬意と感謝の誠を捧げるのか怪しからん、というのは未だに理由がわからない」と言い切った。

小泉首相の発言は概ね正しい。理由は、靖国神社問題で日本が譲歩したとしても、日中問題が解決するとは思えないからだ。中国政府は、日本は押せば必ず引く国、叩けば蹲る国だと見做している。だからこそ、常に押し、常に叩いてくる。押すのも叩くのも、それが日本に言うことを聞かせる最善の方法だと考えているからだ。たとえ１％でも日本に隙があれば、そこを突き日本を後退させ屈服させ、自分の主張を通すのだ。だが、押すにも叩くにも理由がいる。彼らはその際の最善のカードが歴史問題だと心得ている。だから、日本が靖国で譲れば、教科書問題が出てくる。あるいは南京事件も出てくるだろう。尖閣問題も東シナ海の海底資源問題も、どれだけ日本の主張が正しく、国際法上も日本に理があるとしても、中国は自らの非を棚に上げて日本に攻勢をかけ続けるだろう。日本をコントロールする方法として押すこ

と、叩くことが有効である限り、彼らは押すこと、叩くことしか考えない。結果、靖国参拝を中止しても、日中間の問題は解決しないのである。

中国政府の言うように、もし、本当に、日本の首相の靖国参拝が中国国民の心を傷つけ、怒髪天を突くような激しい怒りを招くのであるなら、なぜ、直ちにその時（１９７９年、Ａ級戦犯合祀の報道）から抗議しなかったのか。「Ａ級戦犯合祀」が明らかにされたあとも、大平首相は都合３回、春秋の例大祭に参拝した。後継者となった鈴木善幸首相は３度の８月１５日の参拝を入れて計８回参拝した。

周知のように中国が介入したのは、このあと、１９８５年８月の中曽根首相の参拝のときだ。中曽根氏はそれ以降、中国の非難を受けて参拝を取りやめた。中国の政治圧力に正当な理由なく屈服した氏の行為は決して許されない大きな失敗である。中曽根氏はその失敗を糊塗するかのように、その後現在まで迷走を重ね、今では「Ａ級戦犯分祀論」を主張する。中曽根氏の総理としての功績は高く評価されるべきだが、靖国問題については、氏の犯した失敗は国家としての日本の土台を否定したものであり、余りに深刻だ。

中曽根氏以降、歴代の内閣総理大臣はほぼ全員が靖国問題から目を背け続ける一方で、中国への援助には卑屈なほどに熱心だった。だからこそ、小泉首相が、誰がなんと言っても８月１５日は参拝すると公約したことが、多くの国民の心を打ったのだ。

中韓両国の批判に直面して、参拝の日程をいじりまわす小手先の解決策に走ってきた小泉首相が、今回、ようやく、きちんと物を言った点は評価したい。しかし、その上で、苦言を呈したい。首相はもっと根源的な理解を身に付けなければならないと。

首相は「罪を憎んで人を憎まず」と言ったが、東京裁判の判決をそのまま是とするのが、首相の立場なのか。私たちは東京裁判の中身をもう一度、振り返る必要がある。同裁判の理不尽さ、国際法無視の一方的な見せしめ裁判の実態を知れば「罪」という表現をＡ級戦犯とされた人々に対して軽々に使うことは憚られるだろう。

また首相は右の諺は「孔子の言葉だ」とも述べたが、毛沢東、周恩来から今日に至る中国共産党の歴史を見れば、孔子の教えから最も遠いのが彼らではないのか。仁を理想の道徳とし、孝悌（父母に孝行し兄に従順であること）と忠恕（真心と思いやり）を重視するはずの国が、文化大革命という内戦を１０年間にわたって展開した。四人組は、周恩来らを狙って「批林批孔」運動をおこし、孔子の教えに象徴される中国歴代王朝に伝わる価値観が、まだ周恩来らの中に残滓として存在すると批

判した。四人組は勢力を失ったが、文革の結果として残ったのは、孔子の教えとは程遠い、２０００万から３０００万と言われる罪なき人々を死に至らしめた現実である。

現代中国こそ孔子の教えから遠くはなれ、現世利益追求に邁進する国である。譲ることはこの国では感謝もされない。日本は理性と国益に基づいて、日本の立場を毅然として主張するしかないのだ。小泉首相よ、もう二度と揺るがずに主張を貫け。

櫻井女史が言いたいのは、“ぶれるな、やるなら続けろ”ということでしょう。果たして、安倍首相は来年どうするのでしょう。皆さんはいかがお考えですか。

この続編は、台湾がなぜ親日国かを探るのが目的でした。一言でいえば、後藤新平など時の統治者が善政を敷いたことです。しかし、それ以上に学者、技師、教師、警察官、民間人などが、地域住民の生活向上のために教育、農業、林業などの改良、改善あるいは技能、技術の伝承に一身を投げ打ち、生涯を賭け尽力した多くの日本人がいたからです。

前編で紹介した烏頭山ダムと灌漑用水を建設し嘉南平野を穀倉地帯に変えた水利技術者の八田与一や漆工芸の伝承に生涯を捧げた山中公の他に、阿里山の森林を開発し山岳鉄道を敷設した森林学の河合鉢太郎、 台湾米をインディカ米からジャポニカ米に改良した磯永吉、台湾の製糖産業を飛躍的に発展させた新渡戸稲造、一介の巡査でありながら公務の傍ら寺小屋を開き、住民の嘆願で税の減免に奔走し、それが原因で懲戒免職となり、責任をとって自害に及んだ森川清治郎巡査など一般住民の心を打ったエピソードが数多く残っています。

それらの人々に対し、台湾人は銅像や慰霊碑を建て追悼行事をおこなっています。中には森川清治郎巡査のように、神として祀られている人が何人もいます。上からの押しつけではなく、草の根の活動が台湾の人々の心を打ち、敬意と信頼の絆を築いてきました。これが日本贔屓の底流になっています。これらを受け入れた台湾の指導者と住民の懐の深さが、親日国の背景ではないでしょうか。

完

参考書籍：「李登輝の原点」黄文雄著　ワック株式会社
「帰化日本人」黄文雄、呉善花、石平著　李白社
「台湾と日本がアジアを救う」許国雄著　明成社
「台湾と日本、交流秘話」許国雄、名越二荒之助、草開省三　展転社
「私は毛主席の“小戦士”だった」石平著　飛鳥新社
「“反日”歪んだ中国の愛国」水谷尚子著　文芸春秋
「異形の大国“中国”」櫻井よしこ著　新潮社